



校長室だより

校長 山崎 聡子

出会いは豊かさに

私たちの周りには、自分と異なる多くの方々がおられます。日々、様々な方々との出会いがあり、それはいつもすばらしい豊かさをもたらしてくれます。

先日、地域にお住まいの兼田智子さんが来校されました。兼田さんは、戦争を体験されている方で、紙芝居を通して御自身の戦争体験を語り、再び戦争をしてはならないことを子供たちに伝えることをされていた方です。2015年に、紙芝居文化推進協議会の手作り紙芝居コンクールで受賞された「夏の思い出」という作品を当時の相武台東小学校の4年生（現在は高校生）に見せながら、戦争の体験を話してくださったとのこと。その際「戦時中、大変だったこと」「座間・相模原の戦災は？」「終戦前後の軍の状態」の質問があり、答えることを約束されたとのこと。正しく伝えるために様々な資料を読み、学ばれたそうです。その学びの中で、紙芝居「芹沢のほら穴」を制作され、2016年に紙芝居文化推進協議会コンクールで神奈川新聞社賞を受賞されたとのこと。このたび、当時の4年生との約束を果たすべく本校に御連絡をくださり、本として綴じられた「芹沢のほら穴」をお持ちくださいました。当時の子供たちに伝えることはできなかったけれど、後輩となる本校の子供たちのことを心に留めて、見出された答えを伝えるために御連絡くださった誠実さに感動しました。

「芹沢のほら穴」は、高座海軍工廠（海軍が「雷電」という戦闘機を作っていた工

場）で働いた台湾の少年工の話が出てきますが、実際に太平洋戦争の末期に台湾から13歳前後の多くの少年たちが日本に来て働いていたという実話を基にしながら、特攻隊員として息子を亡くした女性と台湾の少年工との交流が創作されたお話です。兼田さんの戦争体験を織り交ぜながら、一番に伝えたいことを物語の登場人物である、はるおばあちゃんが語ります。

毎日、ご飯がちゃんと食べられて、家族仲良く、そして元気でいられたら、それが幸せだと思うけどね…。だけど、それがなかなか難しい世の中だよね。

何気ない日常の中にこそ、幸せがあることを子供たちに伝えていきたいと思いました。また、争いのない世界は日々の日常の中から創り出していくことこそが必要なことであると改めて考える貴重な時間となりました。

1年生 遠足

1年生が、22日に新江の島水族館に遠足に行きました。イルカショーは迫力があり歓喜の声をあげていました。また、たくさんの生き物の見学を通して、子供たちの輝く表情が引き出され、一人一人が心を動かしていることが伝わってきました。そういう体験こそが子供の心の豊かさに繋がっていくのだらうと思います。バスに乗る時には運転手さんに「お願いします」「ありがとうございます」という言葉を子供たち自ら伝える場面がありました。家庭・地域・学校の中で育まれている力が社会の一場面にも広がりを見せたすてきな姿でした。